



## 統計から社会の実情を読み取る

### 第110回 日本人はどんな家畜と暮らしてきたか

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人農業研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Onlineにて連載を執筆中。



#### 「馬」の時代から「牛」「豚」の時代へ

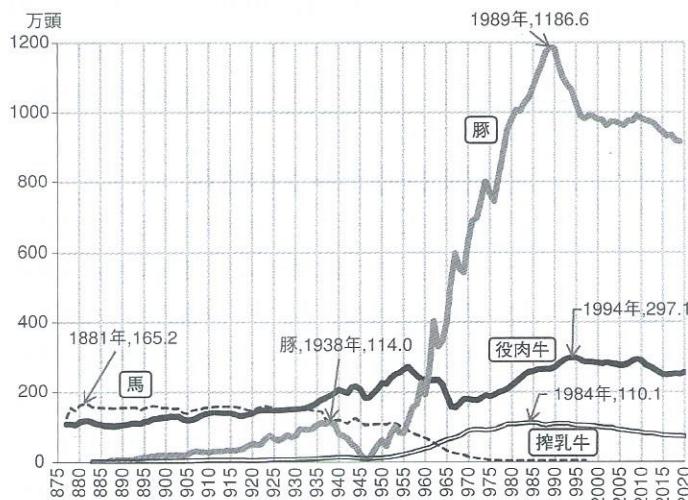
我々日本人はどんな家畜を飼ってきたのだろうか。この点を明らかにするため、1877年(明治10年)以降の家畜飼養頭数の推移をグラフ化した(図1参照)。羊、山羊、鶏、兎などは省略した。

日本の家畜飼養は江戸時代まで基本的には肉用ではなく農耕用(役畜及び糞畜・肥料源)だった。牛馬は運搬用、馬は軍用としても重要だった。つまり肉畜ではなく役畜としての利用が主だった。

明治以降、肉食が解禁されて、最初は老廃牛を食用に供するところから肉食の普及が進み、大正時代には豚肉が加わり、その後、特に戦後、牛乳・乳製品、豚肉、鶏肉、鶏卵の摂取が大きく拡大した。他方、トラクターやトラックが普及して、牛馬は農耕用・運搬用としての役割を終え、馬は基本的に競走馬以外は飼養されず、牛はもっぱら肉牛、そして乳牛として飼養されることとなった。「働く家畜」の時代から「食べる家畜」の時代へと大きく転換していくのである。

馬の頭数推移が役畜の衰退を端的に示していると考えられる。戦前には、それでも、1933年までは、おお

図1 家畜飼養頭数の長期推移



注) 1908 ~ 18年は役肉牛に乳用牛を含む。数字はピーク年次とその頭数。データ欠損年はスキップして接続。

資料) 農林水産省「畜産統計」(2005年までは総務省統計局「日本の長期統計系列」から)

むね150万頭以上と馬の頭数はそれほど大きく減つておらず、役畜として活用され続けていたことがうかがわれる。

牛と馬の飼養頭数を比較すると昭和初期に逆転するまで馬の頭数の方が多い時代が続いていたが、その後、馬は役畜としての役割が衰退し、頭数が減少の一途をたどった。これに対し、牛は役畜から肉用として役割を転換しながら頭数は増勢を維持した。

後段でふれるように、豚はトンカツ、カツ丼、ポークカレーなどの豚肉料理の開発・普及によって東京から全国に広がり、豚の飼養頭数の増加率も牛を上回るに至ったが、戦時中や終戦直後には、食糧難のあおりで、豚を食べるより人間がイモ、残飯など豚のエサを直接食べた方がよいということで飼養頭数は1938年をピークに急減した。

その後、高度成長期には、食糧難の解消、所得向上、食の欧風化、肉食の普及に伴って、豚の頭数が急増することとなった。1961年には、豚の飼養頭数が264万頭と牛を上回り、その後も急増を続け、1989年のピーク時には1,100万頭を超えるに至っている。

豚ほどではないが、飼養頭数の増勢を続けていた牛は、搾乳牛については1984年に110万頭、肉牛については、1994年に297万頭のピークを記している。

主要家畜の飼養頭数がいずれもピークを過ぎているのは、一時期ほどには肉類や乳製品の消費が伸びなくなつたため、及び畜産製品の輸入が増加しているためであろう。

「家畜単位」という考え方がある。大きさの異なる種々の家畜数を換算表示するため、日本では牛、馬は1頭1単位とし、豚は5頭、羊、山羊は10頭、兎は50頭、鶏、アヒルなどの家禽は100羽でそれぞれ1単位とする。

牛には搾乳牛を含めて、頭数の最も多い家畜は何かをとらえるため、この換算単位を適用すると、

1925年まで「馬」の時代が続き、その後、「牛」の時代が現在まで続いていることになる。

日本大百科全書(ニッポンニカ)によると、FAO(国連食糧農業機関)の「家畜及び食肉報告書1946」では、飼料の消費量を基礎に「家畜単位」(animal unit)を算出し、牛を1として、馬0.8、豚3.2、めん羊10.0を1単位としているという(西田恂子)。この換算単位を適用すると、1935年まで「馬」の時代、それ以後は「牛」の時代ということになる。

以上を踏まえ、「日本におけるメインの家畜は何か」を大雑把にまとめると、明治・大正期は「馬」の時代、昭和期に入り、戦間期をはさんで高度成長期までは「牛」の時代、そして、その後は「牛と豚」の時代へと変遷してきているといえよう。

## 「西の役牛、東の役馬」から「西の牛肉、東の豚肉」へ

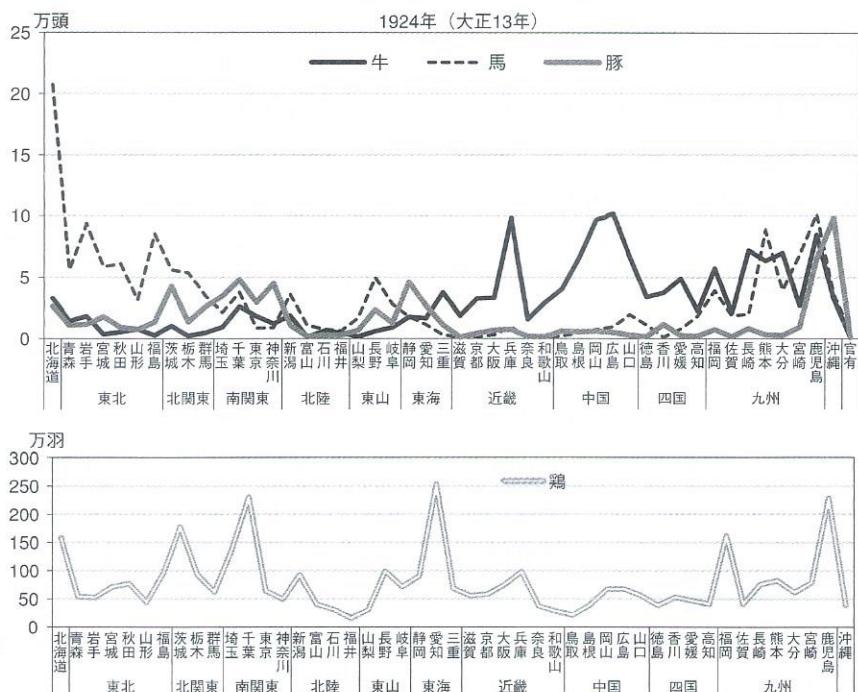
図2には、豚肉がやっと普及し始めた大正時代、1924年段階の都道府県別の家畜飼養頭数を図示した。「東日本」は、牛は少なくて馬が多く、「近畿、中四国」は、馬は少なく、牛が大勢を占め、「九州」は馬も牛も多かったことが明確である。「東日本」で牛が例外的に多かったのは、乳用牛を含む北海道と南部牛の北東北だった。

また、豚が飼養されていたのは、まだ、豚肉料理が開発された東京を中心として同心円状に広がる関東、東山、東海といった地方、及び豚が明治以前からの伝統家畜だった沖縄、鹿児島に限られていた様子をうかがい知ることができる。

このため、戦後になって豚肉の消費が全国的に躍進したのちにも、西日本では牛肉消費が多く、肉といえば牛肉を意味する習慣が長く続いている。

参考に鶏の飼養羽数を見ると、各地方ブロックに北海道、茨城、千葉、愛知、福岡、鹿児島といったような拠点地域が散らばっていた様子がうかがえる。九州全体(あるいは東北)への鶏肉生産の集中

図2 都道府県別家畜飼養頭数（戦前）



資料) 農林省統計表(大正13年)(国立国会図書館デジタルコレクションより)

は戦後の展開によるものだと考えられる。

「西の牛肉、東の豚肉」という食生活上のコントラストが成立した理由としては、豚肉料理が東京から同心円状に普及したからという説が一般的である。

そもそも仏教の影響などで、日本では先行して肉食に馴染んでいた中国や朝鮮半島と異なって肉畜飼養は一般化していなかった。明治維新以降、日本で肉食が解禁されて、まず普及したのは牛鍋などに代表される牛肉であった。屋台の牛飯（牛丼）や兵隊食として牛肉の大和煮缶詰が普及したのも大きかった。牛肉がメインだった欧米からの影響もあったであろう。残飯のエサで飼育される豚の肉は不淨感から嫌われたという可能性もある。軍隊食から普及したカレーライスの肉も明治期にはまだ牛肉だけだった。

こうして、牛肉食は全国に広がっていったが、牛肉食の普及や軍隊食への導入による需要の拡大で牛

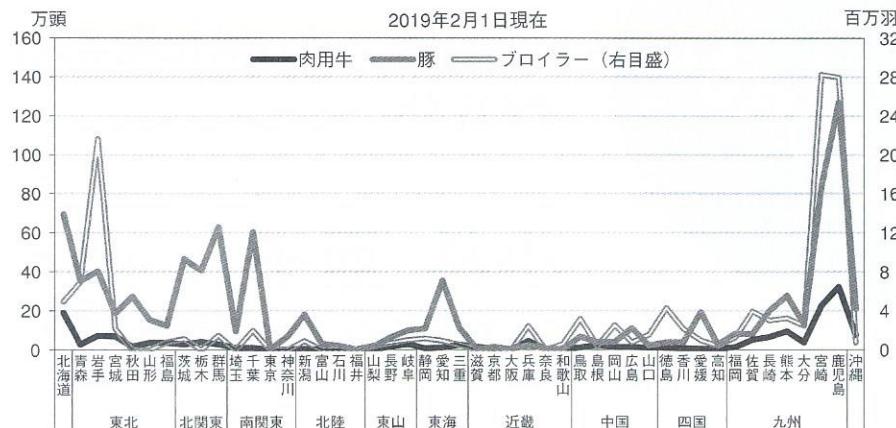
肉の価格は大きく上昇していく。

そうした中、大正7(1918)年に、箸で食べる二つの画期的豚肉料理であるカツカレーとカツ丼が東京で相次いで誕生した。さらにカレーライスにも豚肉が一般的に使われるようになった。値段の張らない手ごろな肉料理を求めるニーズに応え、俗に「明治の三大洋食」と呼ばれるコロッケ、トンカツ、カレーライスが大正時代に豚肉料理として庶民の間に広がったのである。

こうして生まれた豚肉文化が、その後、東京から北関東や東北に伝わって、「東の豚肉」分布が出来上がったと考えられている。

何故、西日本では、豚肉料理が受け入れられるのが遅れ、今でも「肉といえば牛」という考えが残っているかについては、もともと西日本では農耕で馬より牛を使うことが多く、以前より老廃牛の肉に親しみがあったからという説が有力である。しかし、

図3 都道府県別家畜飼養頭羽数（現在）



注) 肉用牛には乳用雄牛を含む。

資料) 農林水産省「畜産統計」

豚肉を受け入れるのに西日本では時間がかかったというより、むしろ、東日本では豚肉を受け入れやすかったと見ることもできる。すなわち、東日本に多かった馬はそもそも肉畜には向いておらず、生活向上に伴う肉需要の高まりに対して東日本では豚肉で対応するしかなかったととらえることもできよう。

農耕馬がまだ残っていた1960年には馬肉は全肉類生産の4%を占めていたが、1970年代には0.1%にまで落ち込んでしまった。日本だけでなく馬肉は全世界的に牛・豚・鶏の肉と肩を並べるようなメインの食材としての地位を獲得していない。何故だろうか。放牧や粗飼料のみであれば馬にも優位性があるが、文明化が進み自然草地が減ってきて、舎飼いや濃厚飼料との組み合わせが主流となる中では反芻動物である牛の飼料効率の方がよいのかもしれない。それとも乗馬や競走馬への親しみ、日本では人馬一体を讃える武士精神が庶民にまで波及して馬の食肉化の妨げとなっているのであろうか。

家畜の地域分布にもどり、図3に掲げた現在の分布への変化をたどる。牛の飼育頭数は、役畜の衰えと肉畜傾斜に伴い、西日本の中でも近畿、中四国は大きく減退し、九州に特化する傾向を見せている。乳用種の肉用牛（いわゆるホルスタ）飼養が多いため

北海道でも頭数が多い。

養豚の地域分布は、頭数の全般的な増加を別にすれば、関東・東海や鹿児島・沖縄に多いというパターンは現在も変わっていない。

養鶏では、養豚や肉用牛と比べて生産費に占める飼料代の割合が大きいので、飼料の運搬費も馬鹿にならない。鶏が東北と九州で多いのは、輸入穀物を原料とする我が国の飼料生産拠点が東日本の太平洋岸と南九州に集中立地していて、そこから遠くない地域にブロイラー生産が集積している影響があると考えられる。

いずれにせよ、牛肉が肉食の中心だった明治期を過ぎて、飼料量に対する肉量の比率で計算される飼料効率が牛より高く、相対的に値段も安い豚肉と鶏肉の躍進がはじまり、現在もなおその動きが地域的に時間差を伴いながら進行中だと見ることができよう。

もっとも、その中で、食の地域個性を重視する意識も高まっており、今後は、食べ方の多様化を伴いながら、肉を食べるなら牛か豚か鶏かの選択をむしろ地域ごとに楽しむ時代が続していくと思われる。肉の地産地消も案外主流になっていく可能性もあるう。